



魔界水滸伝 3、4、5、6  
栗本 薫  
角川書店 (新書)(57/  
8/25、11/25、58/  
10/25、11/25刊・各  
¥600)

この前レビューしたのは二巻までだったのだが、区切りのいいところまでと想っているうちに、いつの間にか六巻。もともと五巻までだったはずなのに、どうやらエンドレスになりそうである(！)。とりあえず、六巻までの内容は、葛城一族に対抗する日本の黒幕、北斗一族の登場(三巻)、アラブの秘密基地と姿を現わした「古き神々」たち(四巻)、中国の砂漠に埋れた宇宙船のエピソード(五巻)、ルポライターの見たランド・シンドローム(ヘインスマウス人)の正体(六巻)と、展開していく。一巻一エピソード。こう書く、あまり進展していませんね、やっばり。登場人物も増えている。作者が後書きで言っているように、おどろおどろしいクトゥール神話からしだいに離れ、デビルマンの世界に接近している。「水滸伝」という以上、英雄たちが次々と集まってくるエピソードが、まだ当面続くのではないかと思われる(ちなみにグインサーガが「三国志」)。一、二巻のころは、まだクトゥールの名が前面にあったけれど、もうそういう雰囲気はなく、英雄同士の対立や、クトゥール神との戦いが主になった。まずは快調のペース。

(俊)